

生きるための知恵

菅原 真弓

さて困った。これまでの人生の中で「教養とは何か」など考えたことがなかったからである。抽象的な思考は私には最も遠いものであるし、自身に教養があると思ったこともないのだ。そう、私には教養はない。なくてもよいとは思わないが、残念ながら私にはない、というのが実際のところである。

専門バカというほどの知識はないが、少なくとも今でも、学部時代からの専門であった日本美術史は好きである。展覧会に行くことも好きだ。但し、私の最初の就職は美術館の学芸員職であったから、展覧会に出かけると、ついつい作品を見ることを楽しむだけでなく、美術館のあり方とは…などと考えてしまうのが残念なところではあるのだけれど。

卒業論文も修士論文も、そして博士論文も日本美術史で、取り上げたのは浮世絵版画だった。浮世絵版画が専門であると言ってもよいのかもしれない。ではなぜ浮世絵版画をテーマにするのか、と言えば、これが日本の美術史では珍しい「売り物」だったからであろうと思われる。明治時代に入ってきた概念であるフィンアートでは決してない、という点が、自身にとって最も魅力的な事柄だったからだ。売り物である以上、これらは常に購買者の興味関心、つまり流行に左右されていくもの。つまり私は「社会」と密接に結びついているものに興味があったのである。

ごくごく幼い頃から日本の歴史に興味があった。そして中学生の頃からは幕末という時代に関心がしぼられてきたように思う。毎週家族で見ていた大河ドラマのテーマにしばしば幕末という時代が選ばれており、その主人公に、その原作に興味を持った、というのが、おそらく原因であろうかと思われる。中学から高校にかけては、司馬遼太郎の小説を読み漁った。あまり大きな声では言えないが、数学の授業を、また地学や生物や地理の授業をさぼって、授業時間ゆえに静かな高校の図書館で、歴史小説ばかりを読んでいた記憶がある。歴史は出来事の集積であり、その推移だ。私が最も興味を持ったのは、幕末の日本という社会だったのだと思う。

幕末から明治期の浮世絵は、否応なく影響を受けざるを得なかった様々な出来事を、幕末の日本社会のありさまを映し出す。天保の改革による民衆の怨嗟を風刺画で戯れのめし、黒船が来航すれば黒船と異人たちを取材もなしに描き出す。たとえば「北亜墨利加洲華盛頓 副将アハタムス像」(図1)を見てみよう。異様に凹凸のある顔に大きく盛り上がった鼻、顔一面の髭。本人を確かめたわけで

はなく、スケッチもしていないことは、アメリカ軍の軍服であるとはとても思えない、中国風の衣装を身に着けていることからわかる。歌舞伎「博多小女郎浪枕」に登場する海賊・毛剃九右衛門（図2）の衣装に似ている。これを見ると、当時の浮世絵師たち（＝庶民）における「異国の人のイメージ」がほの見える。また作品には「身丈五尺八寸」と注記されている。これではまるで両国辺りの見世物の説明だ。文政4年（1821）にオランダ人が持ち込んだという駱駝を描いた絵（図3）が遺されているが、ここにも「身の丈高さ九尺首より尾迄一丈二尺」と記されている。何のことはない、アメリカ人も駱駝も、扱いは一緒なのである。

上は一例だが、一枚の絵を「なぜこれが描かれたのだろうか」「何に似ているのだろうか」「どういう時代背景の下で描かれたのだろうか」と考えて見つめることで、たとえば歌舞伎や大道芸（見世物）、江戸期の日本における異国との交流についても調べを進め、絵をめぐる周辺の様々な事柄に関心を持っていくことになる。歴史の中の小さな小さな部分、特に知らなくとも全く困らないこうした事柄を知るのは、私にとっては楽しいことだ。そして小さな部分を知ることで、その時代の社会のありようが見えてくるように思える。ある時代はもちろん連続する時間の中にあり、現代につながる。現代の事象をたとえばニュースなどで見聞きする時、「いつの時代も変わらないものだ」と思ったりもする。

◆34

さて美術史研究者には、作品により強い関心を持つタイプと、これを制作した作家の人生に強い関心を抱くタイプとがあるように思われる。美術史研究者のハシクレとしての私は全く後者である。社会の中で、学校も含めた組織の中に生きる私たちは、そこで孤立することは辛いし、孤高の立場で生きていくことは難しい。これと同様に、作家と言えども、彼らの生きた時代の社会と無縁ではられない。浮世絵師ならばなおのことだ。だからこそ私は、彼らの人生に興味を持つ。ある時代のある場所で、様々な制約の中でどのように生きて、死んだのか。特に幕末から明治にかけての大転換期に生きた浮世絵師たちの人生は壮絶だ。そして私は美術史の勉強を通じて彼らの人生を丁寧にトレースすることで、自身が生きていくための様々な学びを得ているように思われる。

教養のない私には「教養とは何か」はわからない。けれどももし、そんな私が拡大解釈をしても許されるならば、教養とはもしかしたら「生きるための知恵」なのかもしれないと思う。事にあたって考える際の、自身の根底にある基盤、筋道のようなものかもしれないと思う。社会生活の中で、良好な対人コミュニケーションを構築するためのツールと言い換えることもできる。そしてそれは学問を通じての学びとして得られるだけでなく、たとえばごくありふれた日常生活の中でも得られるものであろう。学問などとは縁遠かった祖父母の世代の方々から語った人生の教えが、それなりの年齢を迎えてしまった私にとって、しみじみと納得

して思い返される現在であるからだ。

(図1) 無款「北亞墨利加洲華盛頓 副将アハタムス像」年代不詳(嘉永7年/1854頃)

35♦

(図2) 月岡芳年「雪月花乃内 月 市川三升 毛剃九右衛門」明治23年(1890)

(図3) 歌川国安「文政四年辛巳六月阿蘭陀人持渡 駱駝之図」文政7年(1824)